月刊 DRF　2016 年 5 月号　No.76 May, 2016　掲載

今そこにあるオープンアクセス　　Clear and present Open Access
第 18 回　科学界のロビン・フッド現わる？
Robin Hood of science appears?

首都大学東京学術情報基盤センター　栗山正光

Sci-Hub (サイハブ)という論文検索サイトが議論の的になっている。出版社版を無許可で大量に提供しており明らかに違法なのだが、多くの研究者に利用され、いまや 4700 万件以上の論文にアクセスできるという。アメリカでエルゼビア社に訴えられ、裁判所から停止命令を受けたものの、ドメイン名を変えて運用を続けている。金持ちから盗み取った財産を貧乏人に分け与えるというイメージで、創設者をロビン・フッドにたとえる人もいる。

このロビン・フッド、実は若い女性である。アレクサンドラ・エルバキヤン(Alexandra Elbakyan)というカザフスタン（だからアメリカの司法の手が及ばない）の大学院生で、Facebook やブログで顔写真も公開している。彼女が Sci-Hub を始めたのは 2011 年のことだが、今年に入って急速に注目を集め、2 月から 3 月にかけて欧米の多くの新聞やブログで取り上げられた（そうした記事の書誌まで作成されている）。

ロビン・フッド以外にもさまざまなアナロジーで語られており、たとえばニューヨーク・タイムズは、米国国家安全保障局(NSA)の機密情報を暴露したエドワード・スノーデン(Edward Snowden)や、JSTOR の論文を大量にダウンロードして罪に問われ自殺したアーロン・スウォーツ(Aaron Swartz)の名をあげている。ワシントン・ポストはナップスター(Napster)になぞらえている。これは音楽ファイルの交換の場になり著作権侵害で訴えられて姿を消したファイル共有サービスだが、音楽配信サービスが主流となるきっかけを作ったとも言われる。アパルトヘイト撤廃運動やキング牧師に言及するブログもある。

上記ワシントン・ポストの記事によれば、論文の不正取得には支援者から教えてもらった複数の図書館のパスワードが使われている。中にはフィッシングで盗み取ったものもあるらしい。エルバキヤン自身はフィッシングに関与していないが、彼女にとってパスワードの情報源は重要ではないという。

しかし大学図書館にとっては、出版社版の流出元が自分の大学だった場合、責任を問われかねない困った問題である。LIBLICENSE メーリングリストでは、2 月半ばから 3 月半ばにかけて、エルゼビア社の人人も参加して Sci-Hub に関し激論が交わされたのだが、最初の投稿は、自分の図書館が Sci-Hub に加担しているのをどうすれば検知できるか？という問いかけだった。これ自体には、出版社側が不審な動きを察知して警告してくれるという回答が寄せられたのだが、その後、議論は「市民的不服従」とか著作権法の見直しといった問題に拡散している。

ここにオープンアクセス(OA)の新たな二分法を見ることも可能だろう。すなわち、合法 OA と違法 OA である。違法 OA は昔からあったわけだが、Sci-Hub ほど大規模に、しかも堂々と自分の正当性を主張しつつ行われたものはなかった。

なお、業を煮やしたエルゼビア社はついに Sci-Hub を買収し、大金を手にしたエルバキヤンは熱帯のビーチで学位論文を執筆する計画を立てている、などという情報も流れたことを付け加えておく（4 月 1 日の話である。念のため）。